



学術資料講演会要旨

カレンダーから世界を見る



日本カレンダー暦文化振興協会理事長・国立民族学博物館教授
中牧 弘允

ご紹介にあずかりました中牧でございます。カレンダーという身近なアイテムをとおして世界を見るとどうなるか、という話をさせていただきます。

カレンダーは日にちや曜日を知るために使っていますが、それだけではありません。友引とか大安という六曜の吉凶は葬式や結婚式の日取りを決めるときに気にします。平安時代には方違えとかの習慣とも繋がっていました。月の満ち欠け、潮の干満は漁師の方などにとっては重大な関心事です。月の満ち欠けに関わる事柄はまだわたしたちの心の底にしみ込んでいると思います。十五夜、特に旧暦8月の十五夜は中秋の名月です。中国では月餅を贈る習慣や帰省の慣習と結びついています。もちろん国の祝日とか偉人の誕生日、あるいは記念日を知るためにも不可欠です。カレンダーに採用されている写真とか絵画を年がら年中楽しむということもあります。わたしの書齋ではJALの「世界の美女カレンダー」が飾られていて、密かな楽しみになっています。

日めくりなどは格言とか教訓、偉人の名言などを載せています。たとえば相田みつを氏のカレンダーなどはなかなか良い事を言っています。これは31枚ありまして1日ごとにくっついていくわけです。古くはベンジャミン・フランクリンが作った『貧しきリチャードの暦』[図1] というのがありました。

古今東西の名言あるいは自作の格言などをそこに印刷して人々に配っていました。

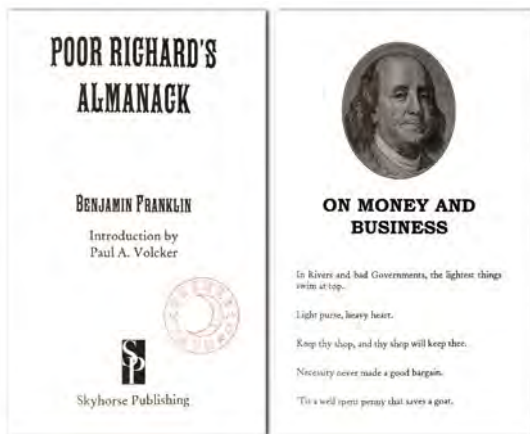
経済の点でいえば企業広告がカレンダーには載っています。近所の酒屋のカレンダーもあれば、大企業が顧客に配るカレンダーもあります。カレンダーをお歳暮にお客様に配る習慣が日本には深く根付いています。他方、ニューカマーの人たちに向けてエスニックビジネスに関わる企業広告を載せているカレンダーもあります。

さらに時代を知ることもできます。カレンダーを比較してみると、どの時代にどのようなカレンダーが使われているか、世界の大きな流れをキャッチすることもできます。たまたまですが今年(2011年)の大学入試センター試験の世界史B、第3問はカレンダーの問題でした。そこに象徴的に表れているように、カレンダーは時代性をもっています。

わたしは20年ほど前からカレンダーを集めはじめ、それを文化人類学や宗教人類学のツールとして使うようになりました。文化を理解する有力なカギを手に入れたわけですね。そこで、カレンダー文化の研究を考古学に習い考暦学と称しております。暦を考える学問という意味です。最近ではキュウレキストと自称する人たちも現れております。旧暦愛好家のことをさすのですが、わたしもその一人と言えます。

カレンダーは、民族学の博物館に勤めている関係もあって世界各地からやってくる人たちからいただいたり、また、自分が出かけていったところで収集したりしてきました。同僚にも頼み、大使館にもお願いをし、いろんな友人関係も使って集めました。現在では70カ国位、約1200点のカレンダーが民博に収蔵されています。2000年までのものですが、その全部が民博のHPにアップされているデータベースで見ることができます。また、その一部は常設展示場にも出ております。

さて、現在のカレンダー売り場はどうなっているのでしょうか。近くのショッピングセンターにいったらみると、戌年ではないにもかかわらず、犬や猫のカレンダーが所狭しと並んで



[図1] 『貧しきリチャードの暦』

います。いまや干支は颜色を失い、癒し系のカレンダーが幅を利かせていることがよくわかります。それから占いのカレンダーも多い。ジャンニズ・カレンダーをそろえるデパートもあれば、阪神百貨店に行けば当然タイガース・カレンダーがたくさん売られています。カレンダーにはうつろいやすい風俗の変遷を解くカギも潜んでいるのではないかと思います。

日本は明治初年に旧暦から新暦、つまり太陰太陽暦から太陽暦へと大きな暦の変更を行いました。この時に出たのが福沢諭吉の『改暦弁』[図2] という本です。



[図2] 福沢諭吉の『改暦弁』(復刻版)

ということが書いてあるかということ、たとえば「太陽暦と太陰暦との弁別」というくだりには「この度太陰暦をやめて太陽暦となし、明治5年12月3日を明治6年1月1日と定めたるは1年にわかに27日の相違にて世間にこれを怪しむ者も多からんと思ひ、西洋の書を調べて彼の国に行われる太陽暦と、古来支那日本等に用いる太陰暦との相違を示すこと左の如し」とあります。

ここに明治6年の暦があります。これは今日この会場に来ているわたしの友人の私蔵品ですが、これは改暦のせいで実際には使われなかったのです。

もう少し詳しく説明いたしますと、11月9日に改暦の詔書、つまり天皇の詔が出ました。それは12月3日を新暦の1月1日にするという急なお達しです。ですから日本史には空白の1カ月があるのです。27日飛ばしたわけですから。

この記念すべき12月3日をカレンダー業界では「カレンダーの日」と定めています。ちなみに「時の記念日」は6月10日です。中大兄皇子、後の天智天皇が初めて漏刻を作った日が新暦に直すと6月10日にあたります。それにもとづい

て大正年間に「時の記念日」ができました。現在でも6月10日になると近江神宮で漏刻祭というお祭りが行われ、古式ゆかしい暦博士とか、漏刻博士とかが昔の衣装を纏って出仕しています。

改暦の話題に戻りますと、なぜ急に明治政府が改暦をしたかということ、真相はどれも財政問題にあったようです。明治5年も終りかけたころ、明治6年に閏月が入るということに気がついたのです。6月のつぎに閏6月が入ってくる。そうすると、1カ月分給料を余計に払わなければならない。それを何とか回避するだけではなく、12月も2日分だけです。実質2カ月分浮くではないか、と考えた人(大隈重信)がいたようで、事の真相は定かではない部分もありますけれども、そういう事情で改暦をしたのではないかと、と言われております。

しかしながら福沢諭吉が説くように、これは実は大きな文明史的な変換だったわけですね。

つまり太陰太陽暦は中国の暦をモデルにしています。それを今度は西洋の暦・グレゴリオ暦に変えるわけですから。財政問題が背後にあったにしても、文明史的な流れからいえば、遅かれ早かれそういう転換をしなければならなかったわけです。

もちろん江戸時代には中国の暦を日本風に若干の改訂をほどこしました。沖方丁(うぶかた とう)さんの書いた『天地明察』の主人公である渋川春海が「大和暦」、のちに「貞享暦」とよばれるものを作り、その改訂版がずっと明治の初年まで使われていたわけです。

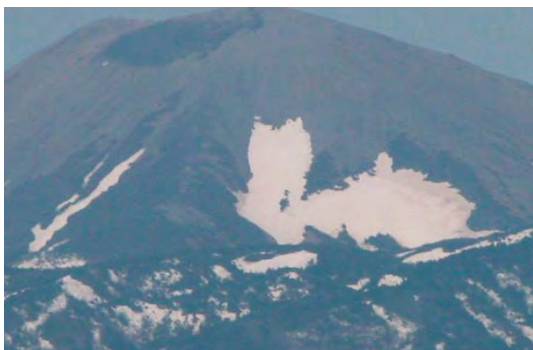
明治政府は明治改暦で時のリズムを西洋に合わせて、文明開化を推進していきました。ところが、旧暦はしぶとく残ります。文化の伝統というものは、そう簡単に、一朝一夕に変わるものではないのです。実際、月遅れの行事というような形で、失われた空白の1カ月を人々は取り戻しました。もともと東京は政府のお膝元ですから現在でもお盆は7月にやっています。でも大方の日本人は8月に帰省をする。こういう月遅れ行事をあみ出すことによって一種の妥協が図られたわけです。

そればかりではなく、特に農山村では高度成長の時代まで、つまり1950年代までは旧暦で行う行事は結構多かったのです。しかしながら高度成長でどんどん近代化し、西洋文明と歩調を合わせていくようになって、現在の新暦、すなわち西暦=グレゴリオ暦が浸透していきました。明治改暦といってもただちに切り替わったのではなく、人々の暮らしの

レベルでは民俗行事等を見る限りずっと旧暦は残っていたわけでは



〔図3〕会津吾妻小富士の種まきウサギ
(撮影 大越公平氏)



種まきウサギ (部分拡大)

これは自然暦というふうに言われているもののひとつで、雪形です〔図3〕。雪形はポジとネガの両方があります。これは会津の吾妻小富士に現れるポジのウサギです。ちょうど桜が咲く時期です。花暦も一種の自然暦ですね。わが国は雪形というような豊かな自然暦をもっています。信州の北アルプスでは、わたしは信州の出身なのであえて言わせていただきますと、代掻き(シロカキ)の白馬、種まき爺さん、武田菱、あるいは常念坊というような雪形が現れ、それを農期の目安としていたようです。中国の暦が入る以前の時間感覚・季節感覚をそこにかがうことができます。



〔図4〕沖縄のカレンダー

こちらは沖縄のカレンダー〔図4〕です。沖縄や奄美では今でもいろんな行事を旧暦で行っています。中国との距離が近いだけでなく、文化の影響も大きく受けていますので、旧暦の行事があいかわらず盛んです。沖縄で生活をする場合には月の満ち欠けを基本に据えた旧暦が不可欠です。



〔図5〕赤間神宮の暦(山口県下関市)

こちらは山口県下関市の赤間神宮の暦〔図5〕です。赤間神宮は壇ノ浦の戦いで入水した安徳天皇の霊をお祀りしている神社ですが、下関は漁業基地なんですね。昔は遠洋漁業で、南氷洋までクジラを獲りに行っていました。「航海安全大漁暦」を見ると、新暦と旧暦とがあります。赤い個所が満月ですね。満月は大潮を意味しますから、漁業関係者にとってはこれが重要な情報です。

大阪の南太平洋協会が発行している旧暦カレンダーにはいろんな情報が載っています。旧暦の1日から始まって晦日で終わるひと月が単位です。しかも17日が満月というような月もあるわけですね。月齢情報だけでなく、六曜、干支の考え方、季節の花とか、火山の大爆発という歴史的な事件とかも記載されています。

キュウレキストの愛好する暦が実はいま息を吹き返しています。あくせく働く日常生活からちょっと逃れたいとか、ホッとスローライフを目指したいという方々とか、俳句を嗜む人々とか、釣りを趣味にしている方々とか、季節にあった料理を出したいという人とか、あるいは衣替えの日にちを知りたいというような人たちが、新暦よりも旧暦を目安にしているわけです。天候予測をみると、「好天なれど風荒れる」というような予測があって、大体70%位の確率で当たると監視者は自己診断していました。売り上げが天候に左右される繊維業界の方たちに重宝がられている暦でもあります。



[図6] 韓国人ニューカマー向けのカレンダー

次はお隣の韓国のカレンダー [図6] にいきたいと思いますが、これは実は韓国のものではありません。日本の新宿で手に入れたもので、韓国からやって来ているいわゆるニューカマーと呼ばれている人たちが使っている暦です。そこには韓国の祝日が書いてあるし、日本で生活するうえで必要な物品を揃えているお店の広告がハングルで載っています。



[図7] 韓国のカレンダー
写真提供：国立民族学博物館

これは正真正銘の韓国のカレンダー [図7] です。そこには今年の干支、お釈迦様が亡くなってから何年という仏紀、それから檀紀もあります。檀紀というのは韓国の檀君という始祖の即位を紀元としています。西暦 1998 年は檀紀 4331

年です。日本では神武天皇の即位を紀元とする皇紀がありますが、韓国では檀君紀元があり、今でもこのような形で残っています。



[図8] 北朝鮮のカレンダー

これは非常に珍しい北朝鮮のカレンダー [図8] です。苦労して手に入れました。金日成主席の生誕紀元が併記されています。発行年は 2006 年ですが、主体 (チュチェ) 95 年にあたります。1997 年に突然始まった年号 (元号) です。中国から距離をおく主体思想をカレンダーにも表現し、北朝鮮の統一をめざしていることがわかります。

台湾に行くと民国暦、すなわち辛亥革命から何年と数える暦が使われています。偶然ですけど、主体紀元と民国暦の年はおなじです。それが国のアイデンティティーと繋がっているわけですね。



[図9] 在日ブラジル人向けのカレンダー

これは在日のブラジル人向けのカレンダー [図9] です。閉じると A4 版です。とても洒落たカレンダーで、封筒に入れ

て送ることができるようになっています。スザーンという運送会社が作ったもので、支店の写真とともに、緊急の時に必要な電話番号が載っています。警察、消防、大使館、空港などです。日本地図には北海道とか、県名がついています。月名表記は January で、Janeiro、つまりリオデジャネイロのジャネイロ（1月）とは書いてない。ブラジル人にとって英語はファッションブルなんだそうです。もちろん日本の祝日とブラジルの祝日が載っています。



〔図10〕 在日ブラジル人のカレンダー（群馬県）

似たようなカレンダーですが、こちらは群馬県大泉町のもの〔図10〕です。ここは在日ブラジル人がかなりの割合を占める町ですけれども、全部ポルトガル語で書かれています。もうひとつは上田市で手に入れたカレンダーですが、長野県の地図のなかに松本城の写真がクローズアップされています。全国の県名や人口の表示にくわえ、ブラジルの州名や州都も対応してあります。日伯友好のシンボルと皆さん思われるかもしれませんが、それだけではありません。実は日本生まれの子どもたちにブラジルの地理を教えているのです。



〔図11〕 ブラジル人が作ったスーパーマーケットのカレンダー（浜松）

ブラジル人が作った浜松のスーパーマーケットのカレンダー〔図11〕には格言が載っています。ポルトガル語で「幸福の第一歩は自分自身を笑うことを学ぶことである」と書いてあります。ソクラテスは「汝自身を知れ」と言いましたが、ブラジル人の店主は自分を笑うことがまず幸せの第一歩だと述べているのですね。このように情報のメディアとしてカレンダーは使われているわけです。



〔図12〕 日本人移民の歴史を辿るカレンダー

情報提供の目的で非常に優れたものと思っているのがこのカレンダー〔図12〕です。

笠戸丸という船で1908年に神戸の港からブラジルに渡った日本人移民の歴史を辿るカレンダーです。ブラジルの日系カトリックの司牧協会が移住100周年に向けて作成したものですけれども、旧約聖書の聖句とつなげて理解させていることがすごいと思いました。「あなたは生まれた故郷を離れて、わたしが示す地に行きなさい」という創世記の聖句をそこに掲げることによって一世たちに思いを馳せる、という趣向です。月ごとに違いますけれども、「わたしは主、あなたの神、あなたをエジプトの国、奴隷の家から導き出した神である」という出エジプト記を引いた6月の頁には結婚式の写真が載っています。1930年代のころですが、日本では文金高島田の時代に、向こうでは純白のウエディングドレスを着ています。現地の習慣に適応した結婚式がもうすでに行われていて、日本人社会も現地に根ざしはじめていることがわかります。現地社会に受け入れられ2世も育ち3世もさまざまな分野で活躍ようになった移民100年の歴史を聖書の枠組みで理解させようと、カトリックの司祭たちが考えて作ったわけです。

移民を送り出した日本政府はどんなカレンダーを作っているのでしょうか。



〔図13〕 外務省発行の生け花のカレンダー

外務省は年末に生け花のカレンダー〔図13〕を発行し、全世界の公館を通じて、世話になった機関や関係者に配布しています。日曜日だけは赤の印字ですが、後は丸印のシールをその国の祝日にあわせて貼ってもらうようになっています。実はそれを真似たカレンダーが出回っております。ケニアにはアフリカの花をあしらった生け花カレンダーがあります。段返し（中綴じ）で、まったく同じパターンです。外務省はこういう文化的な影響も与えているわけです。

わたしの勤務する国立民族学博物館のカレンダー展示も紹介したいと思います。



〔図14〕 国立民族学博物館展示 アステカのカレンダー

これは有名なメキシコのアステカのカレンダー石（カレンダー・ストーン）〔図14〕です。18世紀末にメキシコシティで発見されま

した。3.7メートルもの直径がある大きなものです。本物はメキシコの国立人類学博物館に陳列されています。真ん中にある舌を出した像は太陽神なのか怪物なのかよくわかりませんが、その周囲には4つの時代が刻まれています。周囲には260日を表す、20の絵文字と13の数字の組み合わせがあります。カレンダーとは言っても、日付を知るためではなく、世界観を知るためのものと考えたほうがいいのかと思います。



〔図15〕 国立民族学博物館展示 アンデスの暦

こちらは「アンデスの暦」〔図15〕です。1月は「三博士の訪問」、2月はカーニバルの様子を描写していますが、おもしろいのは7月です。



〔図16〕 闘牛のシーン（7月）

これ闘牛のシーン〔図16〕なんですね。闘牛士がいて、牛がいる。ラッパを吹きながら楽師たちが囃し立てています。この牛にコンドルが結わえつけられ、そのコンドルがくちばしで牛の横腹を突っつけているため、血が滴り落ちています。この図柄は民族学的には意味深長です。スペインでは馬に乗ったピカドールという人が長い槍をもって牛の横腹を突っ

つくんです。それでさらに猛り狂った牛を、マタドールが赤い布をひらひらさせながら興奮させ、最後に心臓に剣を突き刺して、闘牛のドラマが終わります。他方、アンデスではスペインの闘牛をアンデス流に改変しているのですね。「コンドルラチ」と言うのですが、実はこの牛はスペインの象徴なんです。わたしの先生でもあり同僚でもあった友枝啓泰先生の解釈では、牛は強力な征服者のスペイン人をあらわしていて、コンドルがインディオ、つまり先住民なのです。コンドルは牛に結わえつけられている、つまり強力なスペインの支配下に置かれ、そのくびきに苦しんでいるインディオなのです。しかしながらそれに甘んじているわけではなく、牛の横腹を突っついて抵抗をしている。そういうコンドルの姿を表したもののようです。スペイン文化が変容して新世界において継承されたとき、このような形で文化の変容が起きたということを示している興味深いカレンダーです。これも日を知るためのものではありません。芸術作品です。

これからは世界各地のカレンダーについて東南アジア、ヨーロッパの順に紹介しましょう。まずはフィリピンのカレンダー [図18] です。



[図18] フィリピンの大統領選挙のカレンダー

フィリピンの大統領選挙の時に使われたものなのですが、4か月間の選挙期間中だけイスラム暦を追加しています。イスラム票を当て込んでのことです。政治的なカレンダーですね。



[図17] 国立民族学博物館 アメリカ展示

国立民族学博物館のアメリカ展示場では宗教カレンダーを並べています。グローバル時代の諸宗教をカレンダーであらわしたもので、メインはカトリックのシカゴ教区のカレンダーですが、インドのガネーシャの図柄のカレンダー、中国の干支のカレンダー、それから東西の本願寺、生長の家とか天理教とかの新宗教、そういう日本の宗教カレンダーもあります。韓国系のメソヂスト教会とカトリック教会、それからイスラム暦、ユダヤ暦も並べています。グローバル時代の諸宗教 [図17] を展示すると同時に、アメリカ史というのが大西洋だけでなく太平洋を渡ってきた移民によっても形成されたということを示そうとしています。



[図19] シンガポールのカレンダー

これは非常に賑やかなシンガポールのカレンダー [図19] です。西暦以外に中国の農曆、イスラムのヒジュラ暦、インドのタミル暦、それから競馬の開催日を表示したカレンダーが一般に売られています。

東南アジアにはさまざまな宗教があり多様な人々が多民族国家を形成しています。それが仲良く一つのカレンダーに収まっている。カレンダーというのは対立を煽るというよりは、むしろ調和を図るという重要な役割を担っていることがわかります。多民族社会、日本もそういう兆しが見えてきておりますけれども、そういった時にはこういうカレンダーが必要になってくるのですね。

次はヨーロッパです。



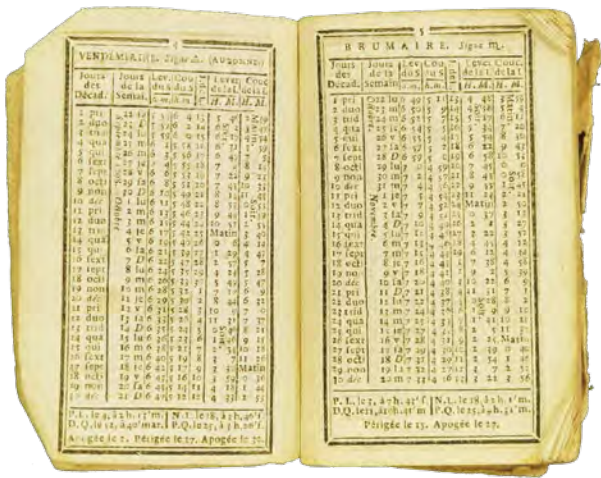
【図20】 オランダのピザ屋のカレンダー

まずオランダのカレンダー [図20] ですが、何の変哲もないバナナの写真の下に、普通のキリスト教の行事に加えてイスラームとヒンドゥー教の年中行事が載っています。イタリアン・レストラン兼ピザ屋さんが発行しているので、ピザの宅配に注文が取れることを願っているものだと思います。これを見るとイスラームの年中行事が意外と少なく、非常に簡素化された合理的な宗教だということがわかります。それに比べるとインドは多民族国家でもあり地方によって文化が異なり、言語も様々だという背景もあって、お祭りがたくさんある。ピザ屋にとっては儲けのチャンスです。インド人は、特にIT関係の人たちが移住者としてオランダにはたくさんいるということを知ることが出来ます。イスラーム暦は多分トルコ系の人たちがターゲットになっているのではないかと思います。一枚のカレンダーからオランダがオランダ人だけでなくトルコ人あるいはインド人たちをたくさん吸収する国に変わりつつあることを知る事ができるわけです。



【図21】 フランスの郵便局発行のカレンダー

このタイプのカレンダーはフランスの郵便局 [図21] が19世紀の後半から出しています。年末に郵便配達夫がこのカレンダーを家に配る際には、心付けをあげるという習慣があります。消防士とか郵便配達の人たちが配るカレンダーがフランスでは一般的で、日本のような企業カレンダーはあまり配られていません。この暦の一つの特徴はネームデーといって聖人名が記されていることです。クリスチャンネームが毎日に割り当てられ、ネームデーの日には誕生日とは別にプレゼントが貰えるのです。そのネームデーに1970年を境に大きな変化が起きました。例えば3月26日はラリッサ、4月27日はジータというようなアラブ系の名前が登場しました。5月2日はボリス。元大統領ボリス・エリツィンからわかるように、ロシア系の名前です。ドナルドというのはスコットランド系で7月15日。フランスのアンリがかつて7月15日だったのが13日に繰り上がり、ジョエルと一緒にさせられているのです。3月27日はハビーブの日で、アラブ系の人たちのデモ行進をする日に選ばれたことがありました。フランスが移民政策に柔軟な対応を示した1970年代のはじめにカレンダーにも外国人の名前が多数盛り込まれたのです。こういう措置を講じることによって、民族や心の融和を図ったことがわかります。



【図22】 フランス革命暦

フランスには有名な革命暦 [図22] があります。フランス革命の時に革新的な暦を施行したんですね、たった12年間だけでしたが、1年は30日が12カ月あって、最後の5日間は徳・才能・労働・言論・報酬という名前が付いて合計365日となります。1カ月は10日間で3回(3旬)で30日です。時間も1日は10時間、1時間は100分、1分は100秒と、24進法や60進法ではない数え方をしています。これはカトリック教会と王制が結びついた旧体制(アンシャン・レジーム)を打破するための措置でした。革命を急速に進めようとして革命暦を施行したのですが、人々にはあまり受け入れられなくて、王政復古をはかるナポレオンが登場することによって姿を消していきます。ナポレオンが再びカトリックのグレゴリオ暦に戻したわけですね。でもパリ・コミューンでは一時的に復活しますし、近年では1989年の革命200年の時には先ほどのフランスの郵便局のカレンダーに特別に出てきます。フランス革命は成功しましたが、改暦は挫折しました。時の支配者が改暦に踏み切っても、なかなか人々がそれについていけない。結果として、古い暦が力をもつという1つの例としてとり上げてみました。

西欧から東欧に移ります。サラエボで収集したカレンダーの紹介です。



【図23】 セルビア正教のカレンダー

旧ユーゴスラビアが崩壊し、ボスニア・ヘルツェゴビナでは血生臭い戦争が1990年代の前半に繰り広げられました。主戦場がサラエボでした。宗教が露骨な形で差別や殺戮に繋がった悲しい歴史をもった地です。そこに出かけていって、カレンダーを収集しました。ギリシア正教の流れをくむセルビア正教のカレンダー [図23] にはユリウス暦にもとづく宗教行事が載っています。ユリウスとはジュリアス・シーザーのことですが、彼がB.C.46年に制定した太陽暦がユリウス暦です。365.25日を1年とし4年に一度閏日をもうけたのですが、時代が経るとともにズレが生じ、1582年、カトリックのグレゴリオ13世のときに改暦に踏み切りました。現在われわれが使っているグレゴリオ暦ですが、ギリシア正教ではずっとユリウス暦を、特に宗教的行事の時には使用しています。たとえば1月7日にクリスマスがやってきます。



【図24】 ユダヤ暦

これはユダヤ暦 [図24] です。ユダヤ暦はだいたい9月に新年が始まるのですが、西暦2005年から2006年にかけての時も9月でした。ユダヤ暦の紀元は旧約聖書の天地



〔図30〕1968年農暦



〔図31〕スローガン

1956年のカレンダー〔図28〕をみると表紙から支援国家工業化という旗印のもとに毛沢東主席が中国の近代化・工業化を図ったことがわかります。表紙をめくると毛沢東の写真があり、政治常識〔図29〕という頁が続きます。もちろんカレンダーもあるのですが、先行するのは毛主席でありプロパガンダ、という時代でした。他方、1968年のものはまさに文化大革命のさなかです。毛主席の写真が表紙を飾り〔図30〕、革命的大連合などのスローガンが横断幕に躍っています〔図31〕。知識人や若者たちが農村に追いやられた下放の時代でした。この時のカレンダーの中身を見ますと、大号召とか革命、生産というようなことが謳われています。カレンダー自体はと見ると、きわめて単純化されたものになっています。カレンダー文化は衰弱しきっていますね。こういう時代をくり抜けて現在の中国があるわけです。



〔図32〕論語カレンダー

今のカレンダーでは、孔子が復活しています。かつて批林批孔のスローガンのもとに、林彪と孔子が批判の対象にされてきました。孔子廟なども破壊の憂き目にあっているわけですが、いまや「子曰く」とあるような論語カレンダー〔図32〕が一般の書店にうず高く積まれています。



〔図33〕2010年上海万博のカレンダー

2010年に上海万博が開催されたときにもいろんなカレンダー〔図33〕が作られました。これをみると毎月5日の日は窓口服務日、要するに窓口でこのサービス精神を発揮しようという日、15日は環境清潔日、つまり環境を整えゴミなど散らかさないようにしようという日、25日は公共秩序日、たとえば信号を守り、パジャマでは外を歩かないようにしようという日です。カレンダーをとおして、上海の人々の意識変革を迫ったわけですね。



〔図34〕2010年道曆

一方、宗教カレンダーも作られています。道教が復興し、道曆が記載されたカレンダー〔図34〕が道観で入手できます（道教の寺院は道教宮観、略して道観という）。道曆の紀元は黄帝、すなわち伝説上の中国の初代の帝王にあります。日本の皇紀、韓国の檀紀に匹敵するもので、西暦2010年は道曆の4707年にあたります。

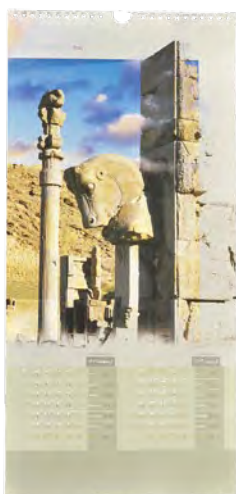
チベットカレンダー、蔵曆〔図35〕も北京のチベット仏教寺院の門前で購入できました。現代風のものですが、重日（じゅうじつ）とか欠日（けつじつ）があり、たとえばこの月は29日を2回やっています。また22日から24日に飛んでいます。こういう日付は日本ではあり得ないことですが、星宿（せいしゆく）、つまり太陽がその星座の宿に留まっている日によって日付をきめるとこういうふうになるわけです。こんなカレンダーがチベット人の間では使われています。



【図 35】2010 年蔵暦



【図 36】2010 年イスラム協会



【図 37】イランの暦

中国のイスラム教徒が使用している暦には、西暦と農暦とイスラム暦 [図 36] が載っています。3つの暦を生活しているのがイスラムの人々の日々の暮らしです。基本は西暦です。それに農暦とイスラム暦が小さくついています。日本の場合、イスラム暦を中心に西暦を併記しても問題はありません。しかし、中国では断じて許されないのです。そういうお国柄であることがカレンダーから読み取ることができます。

イスラム暦がでたついでに、イランの暦 [図 37] も紹介しておきましょう。イランはイスラム国ですが、シーア派の人たちが圧倒的に多く、歴史的にもイランの太陽暦を使っています。3月の春分の日に新年「ノールーズ」をむかえ、1年がスタートします。このイラン太陽暦が日常生活の基本です。宗教行事はイスラム暦、国際的な経済活動は西暦、この3つの暦をイランの人たちは生きているわけです。

いろいろ世界各地の暦を紹介してきましたが、カレンダーに親しむことが現代人の教養の第一歩になりうるし、世界を見るすべを身につけることもできます。ということで、わたくしのつたない講演はちょうど時間となりましたので、このへんで終わらせていただきたいと思います。ご清聴ありがとうございました。



日本カレンダー暦文化振興協会 (暦文協) オリジナル・カレンダー



中牧弘允『カレンダーから世界を見る』白水社、2008

中牧 弘允 (なかもき ひろちか)

1947年長野県生まれ。1976年東京大学大学院人文科学研究科博士課程修了、文学博士。1977年から国立民族学博物館勤務。アメリカ、ブラジル、イギリス、中国などでフィールドワークを行う。2000年にはイギリス・オックスフォード大学ニッサン・インスティテュート招聘フェロー、2004年にはブラジル・サンパウロ大学で客員教授。現在、国立民族学博物館名誉教授、総合研究大学院大学名誉教授、比較文明学会副会長、日本宗教学会理事、企業家研究フォーラム理事、Anthropology of Japan in Japan 会長、日本カレンダー暦文化振興協会理事長。